

アレルギー性鼻炎に対するMS-Aアンチゲン40 のネブライザー療法の臨床効果

国立王子病院

椿 茂 和

東京都板橋区

古 屋 慶 隆, 弘 兼 倫 彦, 萩 原 昭 治

矢 沢 乙 彦, 横 見 美 昭, 鈴 木 博

東京都北区

池 田 朋 子

緒 言

アレルギー性鼻炎の治療に、MS-Aのネブライザーが有効であることは現在までの報告で示されているが、その使用量が少し過量ではないかと思われるので、使用量を少くした場合の効果について検討した。

アレルギー日記も参考にした。

試験方法

1. 対 象

昭和61年2月から6月までの間に受診した15歳以上の通年性アレルギー性鼻炎患者で、15歳以下でも体重が45kg以上のものは対象とした。

2. 検 査

通年性アレルギー性鼻炎を確認するためにアレルギーテスト、鼻内誘発反応、好酸球数検査などを選択施行し、2種目以上陽性であることを条件とした。

3. 薬剤および投与方法

1回にMS-A 2A (80mg)の $\frac{1}{3}$ (約27mg)を使用した。ジェットネブライザーを使用し、実施回数は週2回以上、12回を4～6週で行うこととした。

併用薬剤は原則として禁止した。

4. 経過観察

自覚症状、他覚所見を3回を単位で記録し、

(第1表) 患者 背景

症 例	総 数 除 外 解 析 症 例	51 11 40	
性 別	男 女	18 22	
年 齢	7～10歳 11～19 20～29 30～39 40～49 50～67	2 11 9 5 10 3	(平均 30.0歳)
重 症 度	重 症 中 等 軽 症	9 27 4	
罹 病 期 間	6月～1年未満 3年未満 5 " " 10 " " 11年～20年 不 明	6 11 6 8 4 5	(平均 5.2年)
病 型	くしゃみ・鼻汁型 鼻 閉 型 くしゃみ・鼻閉型	11 2 27	
主 抗 原	H D ダ ニ そ の 他 不 明	27 23 6 1	
既 治 療	あ り な し	35 5	

5. 効果判定

治療前と12回終了時の比較を行って、症状別改善度は、消失、著明改善、改善、不変および悪化とし、奥田の基準に従った。総合効果は、著効、やや有効、無効および悪化とした。

成績

1. 患者背景

第1表に示す。

2. 効果

1) 症状別改善度

第2表に示す。

2) 総合効果

第3表に示す。

3) 効果発現期間

ネビュライザ-3回終了で1例(5%)、6回で7例(35%)、9回で6例(30%)、12回で6例(30%)であった。

(第2表) 症状別改善度

	症状・所見	症例数	消失	著改	改善	不変	悪化	改善率
自覚症状	くしゃみ発作	39	14	5	9	9	2	72%
	鼻閉	38	9	8	11	9	1	74%
	鼻汁量	39	13	4	9	8	5	67%
他覚所見	下鼻甲介腫脹	39	11	8	12	8	0	79%
	水性分泌	40	13	4	8	14	1	63%

(第3表) 総合効果

		著効	有効	やや有効	無効	悪化	有効率
12回終了(40例)		5	15	10	9	1	50%
12以上 回上	12回終了時	2	7	5	3	0	53%
	最終終了時	1	9	6	1	0	59%

4) 病型別、重症度別有効率

第4表に示す。

5) 副作用

1例に皮膚の発疹とかゆみを認めた。

(第4表) 病型・重症度別効果

		例数	著効	有効	やや有効	無効	悪化	有効率
病型	くしゃみ・鼻汁型	11	2	6	2	1	0	73%
	くしゃみ・鼻閉型	27	2	9	7	8	1	40%
	鼻閉型	2	1	0	1	0	0	50%
重症度	軽症	4	2	1	1	0	0	75%
	中等症	27	3	11	7	6	0	52%
	重症	9	0	3	2	3	1	33%

結 論

アレルギー性鼻炎に対し、MS-Aのネビュライザー療法を行った。

1回量を80mg/3、週2回以上施行、4～6週で12回(320mg)行った。

1) 総合効果では、有効率は50%であった。

2) 症状別改善度では、自覚症状では鼻閉の改善が74%で最もよく、次いでくしゃみ発作、鼻汁量の順であった。他覚所見では下鼻甲介腫脹が79%で最もよく、次いで水性分泌であった。

3) 効果発現時期は6回(160mg)、9回(240mg)、12回(320mg)終了時に $\frac{1}{3}$ ずつ、ほぼ同率に出現した。

4) 目のかゆみ、乾燥感を訴えたものが1例あったが、問題になるようなものではなかった。

5) MS-Aのネビュライザー療法に使用する1回量は、27mgで不足なく、充分効果が期待できると思われた。